

評・三浦 佑之 (古代文学研究者)
立正大教授

東京特派員の経験を持つスペイン人ジャーナリストにして作家が、460年も前の戦国時代の日本に渡来したスペイン人宣教師フランシスコ・ザビエルの布教活動を描いた小説である。ザビエルの全生涯46年のうち、1549年8月に鹿児島に上陸し、51年11月に離日するまでの2年3か月間の行動が詳細に語られる。

ザビエル一行は、信仰のためならいかなる苦難にもひるまず歩き回り、人々を教え導こうとし、為政者に面会を求めて布教の許しを得ようとする。しかし、ことはそうそう簡単には運ばず、時に苛立ち悩みながらも信者をふやしてゆ

現代スペイン人の視点で



◇Ramón Vilaró = 生まれ、スペインの代表作家。ジャーナリスト、経済誌の文筆家を務める。

侍とキリスト ザビエル日本航海記

ラモン・ビラロ著

平凡社 2200円

く。慣れない草ばかりの食事、寒さきびしい雪の山道、人々から受ける迫害。一人称ではないが、ザビエルの側の視点で物語は展開する。

用いられた資料は、ザビエルが遺した書簡とジョアン・ロドリゲス著『日本教会史』やルイス・フロイス著『日本史』などである。いずれも翻訳があり、ザビエルの行動や功績について目新しい事実が描かれているわけではない。興味深いのは、ザビエルの驚きが現代スペイン人の筆を通して語られるところだ。

食事や住まいなど西洋人と日本人との生活習慣の違いに対する戸惑いは、ザビエルも書簡でしばしば言及しているが、それらは特派員として日本に滞在した著者自身の戸惑いと重なっているだろう。そのもっとも大きな隔たりとして存在するのが言葉の壁であり、小説の中では、キリスト教の神デウスを大日(如来)と訳して布教活動をはじめ、その誤りの重大さに気づいて訳を改めるところに表れている(本書の原題は『DAINICHI』)。考えてみれば、多神教と一神教とがぶつかり合う現場において、通じることが困難な言葉が出会って混乱するのは当然のことだ。それにもめげず神に忠誠を尽くそうとするザビエルの行動に、信仰の魔力のようなものを感じてしまうのは、私に信仰心がないからだと思う。宇野和美訳。